

「創造性豊かな海園・田園都市」

「田園都市」はともかく、「海園都市」というのは耳慣れない言葉だと思います。香川県、香川大学と高松市で構成した「広域拠点あり方検討委員会」の報告書で新たに出てきた用語です。

この報告書で「クリエイティブ高松」、「海園都市」といった言葉と概念を聞いた時、私は、高松を主な舞台とした村上春樹の小説「海辺のカフカ」の中にある詩の一節を思い出しました。

「海辺の椅子にカフカは座り 世界を動かす振り子を想う」

舞台はサンポートでしょうか。独特の^{とら}抱えどころのない言葉の列ですが、私の中で勝手に高松都市圏の未来とイメージをつないでいます。

本市の最大の特徴であり、魅力は、^{こにしかなう}小西和の「瀬戸内海論」の序文で^{にとべいなぞう}新渡戸稲造が、「私は実に『世界の宝石なり』と断言する」とした美しい瀬戸内海の臨み、開かれていることにあることは、万人が認めるところです。しかしながら、報告書の指摘にもあるように、郊外化とモータリゼーションの相乗作用による画一的な都市化や無機的な市街地の拡散が、個性やアイデンティティーを喪失させ、魅力と活力を損ない、本四架橋の開通もあって、広域的な観点から見れば、「瀬戸の都」、「四国の玄関」と呼ばれた高松が、その求心力を失いつつあることも事実でしょう。この現状を打開すべく、高松都市圏の将来のあり方を「海園都市」という絶妙のネーミングとともに、多角的に示している本報告書の提言は誠に示唆に富み、有用なものとなっています。今後、「創造性豊かな海園都市推進委員会」を中心とした活動に期待したいと思います。

ところで、先般、本市と土庄町、小豆島町、三木町、直島町、綾川町の1市5町で「瀬戸・高松広域定住自立圏（仮称）」を構成し、国が掲げる定住自立圏構想の先行的実施団体に応募しました。これからの人口減少、少子高齢社会において大都市圏への集中が極端に進むことのないよう、地方圏において一定の高次な都市的機能の集積、確保を図り、いわば人口や文化のダムの機能を果たそうというものです。圏域全体では、人口約50万7千人、面積約745平方キロメートルとなり、規模的にも、有する都市機能としても、また豊富な地域資源をとっても、中四国において堂々たる中核的で魅力的な都市圏となります。何をやっていくのか、具体的な協議はこれからですが、広域による行政展開の利点を最大限引き出しながら、海、野、山を活かし、^{しま}島、^{まち}街、^{さと}里が一体的に融合した創造性豊かな海園・田園都市づくりを目指していきたい、と思っています。